



さん お
燦を追いかけて

2024/5/21

No.16

岩渕和信



この「燦」の題字は、横浜国立大学の
青山浩之教授が書かれました。

「青山先生、この字を書かれたときの思
いをお聞かせくださいますか」

「はい。『燦燦』でもいいし、『燦然』で
もいいと思うんですけど、いずれにしても、なんか遠くの方で、こう、輝いてる
もの？それへの憧れみたいなものがあり
ますよね」

「はい」

「手元で輝いてるんじゃないんですよ。
遠くで輝いてる。それを、こう、眺めて

るだけじゃなく、なんか少しでも、自分が近づこうという意識は、ありますね」

「なるほど」

「『燦』っていう字を、ただ輝いてるという意味だけじゃなく捉えたいんですよ。遠くで輝
いているもの、それを自分の意思で見てる感じですね」

「意思で見ている」

「そう。ただ、輝いてるものがあるっていうんじゃなくて」

「あ、ただぼーっと目に入ってるっていうんじゃなくて」

「そう、自分がその燦然と輝いてるものを、自分で見てる、って
いう感じですね。自分がそれを手にしたいっていうよりも、自分
がそこへ近づいていきたいという主体性を持ってこの字を書
きました」



(湘南学園のみなさんへ)

いろんな大人がいますが、僕はこの「燦」を書いているときのよう
に、遠くを見て輝くものを追いかけています。そんな大人もいるんだって
いうことを「燦」を見て思ってくれたらうれしいです。(青山浩之)